

ブレトンウッズの ホテルにて

きたおかしんいち
北岡伸一

国連日本政府代表部特命全権大使

今

年の夏休みにドライブ旅行をした際、ニューハンプシャー州のブレトンウッズに行き、マウント・ワシントン・ホテルという由緒あるリゾートホテルに1泊した。1944年、世界の44カ国が参加して戦後金融秩序を討議し、決定したブレトンウッズ会議が開かれたところである。

部屋のドアの外側には、当時宿泊した代表の名前を書いたプレートが貼ってある。私が泊まったのはブラジル代表が泊まった部屋だった。ケインズやモーゲンソー米財務長官が泊まった部屋も近くにあった。興味にかられて、ホテル中を見て歩いた。

まず気がつくのが、米大陸からの参加国が20カ国、全体のほぼ半数を占めるといふことである。彼らは戦争で痛手を負っていなかった。一方、アジアからの参加は中華

民国、インド、フィリピン、イラク、イランの5カ国、アフリカからはエジプト、南アフリカ、リベリア、エチオピアの4カ国だけだった。そのうち中華民国は戦争中、インド、フィリピンはまだ独立前で、南アは英連邦の一員だった。また大洋州からは、やはり英連邦の構成国であるオーストラリアとニュージーランドが参加していた。ヨーロッパからは、英、仏、ベルギー、ルクセンブルク、北欧からノルウェーとデンマークとアイスランド、中東南欧でポーランド、チェコ、ユーゴ、ギリシャ。ソ連を入れても13カ国しかなかった。しかもそのうちのかなりの部分は、まだドイツ支配下にあった。

要するに、米英ソ以外に主要な国は見あたらず、しかも金融の問題だったので、圧倒的な米英主導だったわけである。

今日、事態は大きく変化したように見える。日独などの復興と発展、ヨーロッパ諸国の復興、アジア

アの発展などが、主要要素である。国連の安保理改革を日・独・インド・ブラジルなどが進めようとしているのは、こうした新興勢力の挑戦という面がある。

他方で、現在でも米英主導は依然として存在している。まず安保理がそうだ。また言語でいえば、米英以外にオーストラリア、ニュージーランド、カナダ、インド、パキスタン、フィリピン、南アなど、英語国が力を持っている。

非英語国でも、日独は同盟でアメリカと強く結びついている。東欧もNATOに加わりうとしている。デモクラシーの概念は世界を席巻しており、これに抵抗する中国も、独自の市場経済を発展させ、若者には強烈なアメリカ志向がある。

米英が依然として力を持っている世界で、いかにそれと衝突することなく日本の独自性を打ち出していくか、過去150年の近代日本の課題は今もここにある。☺